

日本倫理学会第69回大会共通課題「倫理学における自然」
2018年10月7日 玉川大学にて

メタ倫理学の自然化への反対論 を自然化する

伊勢田哲治(京都大学)

話の流れ

1. 「自然主義的誤謬」の自然
2. 本発表での「自然」
3. 道徳心理学の発展
4. 「メタ倫理学の自然化」
5. 社会科学における解釈主義
6. 解釈主義的メタ倫理学
7. 解釈主義的メタ倫理学と自然化されたメタ倫理学
8. 解釈主義的メタ倫理学をさらに自然化する

背景

- 近年の道徳心理学の発展はめざましい(進化生物学、実験心理学、脳神経科学)
- これをもとに倫理(「道徳」と区別せず使う)とは何かという問いに自然科学的に答えようというアプローチ「メタ倫理学の自然化」
- そうした研究は倫理という複雑な全体の一部を取り出してはいるが、倫理学者が着目してきた部分とはずれるのではないか。
- 社会科学における「解釈主義」の方がむしろ倫理学者の考えてきた倫理をよりよくとらえるのではないか。

「自然主義的誤謬」の自然

ムーア『倫理学原理』

- 「自然主義的倫理」と「形而上学的倫理」がともに犯している過ちとして「自然主義的誤謬」を位置づける(p.39)
- 自然主義的誤謬:「善」が何か他の性質を持つと言うときに、その性質によって善が定義できる、その性質が善と同一である、と主張する誤謬 (p.10)「定義主義的誤謬」
- 自然主義的倫理:「自然的」だというのは「自然科学や心理学の対象である」「時間の中にある」という意味 (p.39)

その後のメタ倫理学

- 1970年代ごろまで: 自然主義的誤謬を犯している立場を自然主義と呼ぶ (Hare 1952 ch. 5)
- 1980年代以降: 分析的還元主義、総合的還元主義、非還元主義的自然主義などの総称としての「自然主義」(佐藤 2017, ch. 4)

本発表での「自然」

本発表では

- 自然主義という言葉ができるだけさけ、「自然化」を使う
- 自然：自然科学の対象となるもの（物理現象、化学現象、生物現象、行動主義的な意味での心理現象等）
 - 他の用法を否定するわけではないが、いろいろな用法を同じ発表の中で混用すると混乱する

道徳心理学の発展

進化的観点

- 1960年代～：血縁選択、互惠的利他行動
- 1970年代～：社会生物学（人類への適用）
- 1990年代～：進化心理学
 - 汎用的抽象的道德的推論能力ではなく裏切り者検出などに特化した能力の進化
- 進化的観点は必ずしも生物学還元論や生得主義ではない（二重継承説など）

実験心理学的手法

- 「道徳的直観」についての諸研究
 - ハイトの「社会直観主義」
 - 近親相姦の物語を使ったインタビューの分析
 - 人間の道徳判断は理性ではなく感情で行われる
- 「自由意志」「責任」「性格」「美徳」など
 - リベットの実験
 - 「自由意志による行為」が操作可能であること
 - 「性格」の非一貫性

脳神経科学的知見

- グリーンらの研究
 - トロッコ問題のさまざまなバリエーションへの判断実験とfMRIの組みあわせ
 - 認知心理学でいうところの「二過程理論」
 - 無意識にすばやい判断を下すことのできる「早い」過程と熟慮の末判断を下す「遅い」過程
- 脳損傷患者を対象とした実験
 - 感情に関する部位の損傷と道徳判断能力の関係の研究

「メタ倫理学の自然化」

メタ倫理的な主張への含意

- われわれは直観によって善や悪といった道徳的性質を把握できるか
 - 暴露論証: およそ客観的な善悪を把握するというのとかけ離れた要因によってわれわれの直観が形作られていることがわかったなら、直観能力への信頼は掘り崩される
- 動機内在主義対外在主義
 - 「後天的ソシオパス」の研究
- 認知主義対非認知主義
 - 感情主義の提案

メタ倫理的な主張への含意

- ヒュームの心理学:「欲求」と「信念」の二分法をベースとした心の理解
 - 認知科学の哲学の文脈では「民間心理学」と呼ばれるもののオーバーラップ
 - 民間心理学的カテゴリーについての消去主義

メタ倫理学の自然化

- 「道徳という現象を自然科学の対象となるものとしてとらえ、その観点から伝統的なメタ倫理学の問いに答えようとするアプローチ」と定式化する
- 自然科学には行動主義的な心理学も含む
 - まさにここで紹介してきた道徳心理学の発展に見られるように、その意味での心理現象は生物学的現象や脳神経科学的現象と親和性が高く、グリーンのように心理学と脳神経科学を組み合わせた実験を行う研究者もいる

「自然化」への違和感

- 自然化の動きがメタ倫理学の議論を活性化し、かつてないほどの活況を生んでいることはまちがいない
- 他方、近年の道徳心理学が研究対象としているものは、これまでメタ倫理学において研究の対象とされてきた「道徳」や「倫理」と同じものなのか、という違和感がある

普遍化可能性

- Xという対象についてある価値判断を下したなら、Xと普遍的な性質（固有名など以外の性質）においてまったく同じX' についても同じ価値判断を下さなくてはおかしい、という道德判断の持つ性質(ダブスタはNG)
- 道德判断が普遍化可能性という性質をもつこと自体はいまだに多くのメタ倫理学者が認めるだろう(それだけでは道德の客観性の基準として不十分という批判が多い)
- ところが、この普遍化可能性にあたる概念は道德についての自然科学的な研究ではほとんど姿を見せない
- 認知的不協和メカニズムを使った自然化(伊勢田 2012, ch.5)

フレーゲ＝ギーチ問題

- 感情の表出や態度の表明が条件文や推論規則の中にどう組み込みうるのか明らかでない
 - 条件文:「もし万引きが悪いなら先生がそう教えてくれたはずだ」
 - 三段論法的な推論:「万引きは悪い、そしてもし万引きが悪いなら先生はそう教えてくれたはずである、したがって先生は万引きが悪いと教えてくれたはずである」
- 非認知主義への強力な反論
- 道徳心理学の文献ではまず触れられない
- 「感情の表出は推論の一部として機能しうるか」といった問いをどう経験的研究の対象にすればいいかも明らかではない。

協力行動

- 道徳心理学では道徳性の本質を協力行動であると規定して話がはじまることが多い(進化生物学的議論で特に)
- 確かに倫理的な行動の多くは結果として何らかの協力行動になることが多いだろうが、それはわれわれが倫理というものを協力行動としてとらえていることを意味しない
 - 義務論: 人を殺してはならないのはそれが義務だからであって、相手と協力するために相手を殺さないわけではない
 - 功利主義: 人を殺してはならないのはそれが幸福を最大化しないからであって、殺すという行動が非協力的な行動だからではない

社会科学における解釈主義

手がかりとしての解釈主義

- メタ倫理学は一体何について語ってきたのかという問いに答える助けとなると思われるのが、社会科学の哲学における解釈主義と呼ばれる立場
- 実証主義対解釈主義
- 実証主義：社会科学の「自然化」
- 解釈主義：実証主義では社会科学が本当に研究したい対象にせまれない
 - 実証主義と対抗する社会科学方法論として理論的に洗練されてきた

さまざまな解釈主義

- 社会学においてはウェーバーの「理解社会学」を起源としつつ、シカゴ大学を中心とした「シンボル相互作用論」と呼ばれる立場などを中心に、方法論として整備されてきた(Blumer 1969)
- 哲学者の側ではテイラーによって解釈主義の基本的な考え方が整理された(Taylor 1971; Taylor 1980)。
- 単一の立場というよりは同じ傾向を持つさまざまな立場の総称

解釈主義的社会科学の特徴

- 行動にあらわれる人間関係や社会構造ではなく、その共同体の成員が世界をどのように解釈しているかを理解することが研究の目的
 - 共有された世界観や価値観、それらに基づくさまざまな出来事の意味付け、社会の仕組みや序列についての理解など
 - シンボル相互作用論は、そうした共通了解がシンボルを使った相互作用によって形成されていくと考える(ごっこ遊び、チームで行うゲームへの参加)

解釈主義と社会現象

- 社会現象の多くはそうして共通了解を作っていくことで成立したもののだが、あまりに確立しているために、そうした起源を意識するのは難しい。
 - 通貨
 - アメリカ大統領の権能
 - それらの背景にある法令
 - 一万円札を物理的・化学的に分析したり、生物個体としてのアメリカ大統領を生物学的・脳神経科学的・心理学的に分析したりしてもそれらの持つ価値や権能の根拠は見つからない

解釈主義と社会科学の方法論

- 共通了解はさまざまな形で共同体の成員の外面的な行動を縛る
 - 外面的な行動は客観的に調査することが可能
- しかし、その共同体の成員たちがなぜそうした外面的行動をとるかを理解するには、彼らに世界がどう見えているかを知る必要がある
- 本人たちと話をする中で彼らに見えている世界を共有するという方法
- → 参与観察：研究対象となる共同体に部分的に参加して、共同体のメンバーから世界がどのように見えているのかを理解する手法

シンボル相互作用論における「自己」

- われわれが「自己」だと思っているものもかなりの部分まで社会的な相互作用の中で構築されるという考え方
 - チームで行うゲームをする中で、われわれは自分を「一般化された他者」の視点から見ることを学ぶ
 - ゴフマンのドラマトウルギー理論
 - われわれの「自己」は、その場その場で「観客」や「共演者」の期待に答えながら演じることで形成される
 - 観客や共演者が重ならない別の文脈（職場と家庭など）ではまったく異なる自己が形成される

解釋主義的メタ倫理学

解釈主義をメタ倫理にあてはめる

- 善や悪、正や不正、あるいは最近のメタ倫理学のはやりでいえば「理由」などは、社会的な相互作用の中で、意味を与えられ、共通了解として成立し、共同体のメンバーにとって「見える」ものとなっている
- 解釈主義は一人称的視点の重要性をクローズアップする(三人称的側面もある)
 - 自然化されたメタ倫理学は三人称的に倫理をとらえる(彼らは何を倫理の名の下にしているか)
 - それに対し、メタ倫理学のある種の特徴(普遍化可能性、条件文や推論での使用の適切さ)は道德判断を下す本人たちの視点(わたし／われわれは倫理的に何をすべきか)で見たときはじめて見えてくる

解釈主義の複眼的視点

- 解釈主義の三人称的視点からは、善悪は相互作用の中で構築される(シンボル相互作用論的構築主義?)
- 解釈主義的研究によって明らかにされる一人称的視点からは、構築されるものとは見えないかもしれない。人間とも自然とも独立にそこにあるように見えるかも(非自然主義的实在論?)
- 二つの視点を同時に持つことそのものに矛盾はない(この立体は上から見れば円だが横から見れば長方形だ、というのが矛盾しないように)

シンボル相互作用論的構築主義

- 反実在論的にとらえる必要はない。
 - 通貨やアメリカ大統領が実在的でありうるなら善悪も同じ意味で実在的でありうる
- 行為者の気が変われば善悪も変わるというわけではない(相互作用的事であることからくる拘束性)

暴露論証との対比

- 解釈主義的なメタ倫理学によれば、善悪が普遍的だというのはただの幻想だということになるのか？
- われわれがある社会的なプロセスを経てある判断が下せるようになったとしても、そこからはその判断の対象が実在しないとか、幻想であるという結論は導けない
 - 小学校の生徒たちが、先生や他の生徒との相互作用の中で、太陽系の惑星の名前を順番に言えるようになったり、九九が言えるようになったりしたとしよう。それが社会的相互作用の結果であるとしても、その生徒の「水星は太陽に一番近い惑星である」とか「7かける8は56である」といった信念が幻想になるわけではない。

やめるという選択肢がないものとしての の一人称的倫理

- 暴露論証的な捉え方に反対するもう一つの理由は、われわれは「一人称的な倫理をやめる」という選択肢を持たないということ
 - 義務論的思考に暴露論証をあてはめるグリーンは一種の帰結主義を支持するが、その判断はグリーン自身の一人称的視点からやっているのだからどうやって下しているのか

一人称的視点の多様性

- メタ倫理学の歴史において多様な立場が提案されてきたことを踏まえると、一人称的視点が實在論的だとは簡単には言えない。
- 普遍的指令主義者、投影主義者etc.
- 道德というものについての「共通了解」が、完全には「共通」ではなく、大まかな一致点はあるつつもそれぞれの人がある置かれた環境の中で異なる了解のしかたをしている、ということだと解釈可能
- この状況を「つまり倫理とは何かについての答えは人それぞれ」とまとめてしまうと三人称的視点に無意識に戻っているので注意

シンボル相互作用論的な倫理的自己

- 倫理的主体も相互作用の中で構築された産物
 - 自由意志を持ち、個人的な欲求を持ちつつも道徳規範を理解してそれに拘束されるような「道徳的行為者」としてのわれわれも、相互作用の中で形作られたイメージないし役割

解釈主義的メタ倫理学と自然化された メタ倫理学

メタ倫理学の自然化で抜け落ちるもの

- 倫理のうち、共通了解によって構築される部分は、物理学、化学、生物学、自然科学的アプローチの心理学などの研究対象となるようなことがらによって決まらない部分でもある
- ただ単に視点からぬけおちるというだけでなく、分析が的外れになってしまう可能性もある

たとえば

- ヒトの個体を生物学的・心理学的に調べても、なぜそれが(チンパンジーの個体にない)「尊厳」という性質を持つのか分からない
- なぜ道徳的な思考をする際に、やっていることがダブスタになっていると指摘されたときにそれを放置できないのかも分からない
 - 尊厳も普遍化可能性も共通了解の中の一人称的視点から見てはじめて意味を持つ

自然科学的知見がまとはずれになり うる場合

- 脳神経科学的な見地からわれわれの意思決定は外的な要因によって決定づけられていることがわかったとしても、一人称的に倫理というものを考えるときにわれわれが自分は自由だと感じざるを得ないのであれば、そうした脳神経科学的知見は的はずれ
- ある道德判断を下した人がその判断に従って行為するように動機づけられるとは限らないという心理学的知見があったとしても、われわれが自分自身の判断について一人称的に振り返ったときにそうした拘束力を認識するなら、心理学的知見の方が的外れ

**解釈主義的メタ倫理学をさらに自然
化する**

解釈主義の自然化

- 解釈主義的な意味での倫理や道徳というものの、自然科学的なアプローチで明らかにできる側面がないわけではない
- 相互作用を通じて共通理解を育て、その共通理解を一人称的に眺める存在としての人間は、同時に生物学的・心理学的な存在であり、そうした営みそのものが生物学的・心理学的基盤を持つ

解釈主義と進化

- 倫理というものについての共通了解の中に「進化」の概念があらわれないとしても、その共通了解が人類の進化の歴史から自由だということは意味しない
- そもそも道徳というものについて、あるいは倫理的自己について共通了解を形成する能力がどうやって進化の中で登場したのか、と問うこともできる

解釈主義と心理学的・脳神経科学的 知見

- たとえば、われわれがある程度以上の犠牲を他人のために払うことが心理的に不可能ならば、そうした過度の犠牲を要求するような規範は共通了解とはならないだろうから、なぜある種の規範が共通了解とならないかをそうした心理的メカニズムを使って説明することができる
- グリーンがトロッコ問題のさまざまなバリエーションを使って明らかにしたわれわれの直観の働きは、なぜ義務というものがわれわれに見えているような形におちついているのかについて示唆を与えてくれる
- 安易に暴露論証と結びつけないことが大事

まとめ

- 現在進行しているメタ倫理学の自然化は、解釈主義的な視点、とりわけ倫理という営みへの参加者としての一人称的視点を見落とすなら、重大な欠落を持つ
- そうした解釈主義的なメタ倫理学は、究極的には自然化されたメタ倫理学と対立するわけではない
- 一人称的視点と三人称的視点を区別し、複眼的に倫理というものを見ることを忘れないかぎり、メタ倫理学の解釈主義的アプローチは、さらに次の段階の自然化へとつながりうる潜在性を秘めている

文献

- 伊勢田哲治 (2012) 『倫理的に考える 倫理学の可能性をさぐる十の論考』勁草書房
- 太田紘史編 (2016) 『モラル・サイコロジー 心と行動から探る倫理学』春秋社
- 佐藤岳詩 (2017) 『メタ倫理学入門』勁草書房
- Boyd, R. and Richerson, P.J. (1985) *Culture and the evolutionary process*. University of Chicago Press.
- Blumer, H. (1969) *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Prentice-Hall.
- Cosmides, J. and Tooby J. (2008) "Can a general deontic logic capture the facts of human moral reasoning? How the mind interprets social exchange rules and detects cheaters" in Sinnott-Armstrong 2008 53-119.
- Frankena, W.K. (1939) "The naturalistic fallacy" *Mind* 48, 464-477.
- Goffman, E. (1956) *The Presentation of Self in Everyday Life*. University of Edinburgh, Social Sciences Research Centre
- --. (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-face Behavior*. Doubleday.
- Greene, J. D. (2013) *Moral tribes: emotion, reason, and the gap between us and them*. Penguin Books; 邦訳 グリーン『モラル・トライブズ: 共存の道德哲学へ』竹田円訳、岩波書店、2015年
- Greene, J.D. (2008) "The secret Joke of Kant's Soul" Sinnott-Armstrong 2008b, 35-79.
- Greene, J.D. et al (2001) "An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment" *Science* 293 (5537), 2105-2108.
- Heidt, J. (2001) "The Emotional Dog and Its Rational Tail" *Psychological Review* 108, 814-834.
- Haidt, J. and Bjorklund F. (2008) "Social intuitionism answer six questions about moral psychology" in Sinnott-Armstrong 2008a 181-217.
- Haidt, J. (2012) *The righteous mind: why good people are divided by politics and religion*. Pantheon Books. 邦訳 ハイト『社会はなぜ左と右にわかれるのか: 対立を超えるための道德心理学』高橋洋訳、紀伊國屋書店
- Hare, R.M. (1952) *The Language of Morals*. Oxford University Press.
- James, S.M. (2011) *An Introduction to Evolutionary Ethics*. Wiley-Blackwell; 邦訳 ジェイムズ『進化倫理学入門』児玉聡訳、名古屋大学出版会
- Kennett, J. and Fine, C. (2008) "Internalism and the evidence from psychopaths and 'acquired sociopaths'" in Armstrong 2008b 173-190.
- Moore, G.E. (1903) *Principia Ethica*. Cambridge University Press.
- Richerson, P.J. and Boyd, R. (1992) *Not by genes alone: how culture transformed human evolution*. University of Chicago Press.
- Roskies, A. (2003) "Are ethical judgments intrinsically motivational? Lessons from 'acquired sociopathy'" *Philosophical Psychology* 16, 51-66.
- Sinnott-Armstrong, W. ed. (2008) *Moral Psychology vol. 1: The evolution of morality: adaptations and innateness*. The MIT Press.
- -- ed. (2008a) *Moral Psychology vol. 2: The cognitive science of morality: intuition and diversity*. The MIT Press.
- -- ed. (2008b) *Moral Psychology vol. 3: The neuroscience of morality: emotion, brain disorders, and development*. The MIT Press.
- -- ed. (2014) *Moral Psychology vol. 4: Free Will and Moral Responsibility*. The MIT Press.
- Sinnott-Armstrong, W. and Miller, C.B. eds. (2017) *Moral Psychology vol. 5: Virtue and Character*. The MIT Press.
- Street, S. (2006) "A Darwinian dilemma for realist theories of value" *Philosophical Studies* 127, 109-166.
- Taylor, C. (1971) "Interpretation and the sciences of man" *Review of Metaphysics* 25 pp. 3-51.
- ---. (1980) "Understanding in human science" *Review of Metaphysics* 34, 3-23.
- Yoshida, K. (2014) *Rationality and Cultural Interpretivism: A Critical Assessment of Failed Solutions*. Lexington Books.